

港北ニュータウン

Participant Park

住民参加による公園づくり

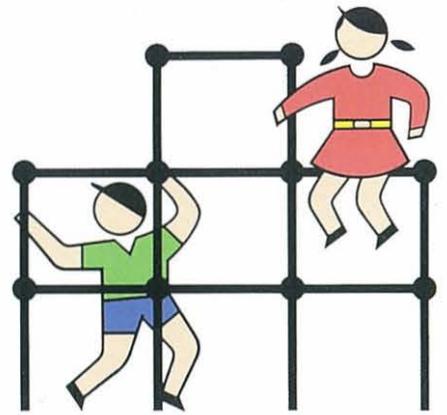


住宅・都市整備公団
神奈川地域支社 港北開発事務所

MAY. 1998

制作 | (株)アーケ造園設計事務所
(株)RIVアソシエーツ©

つくられた街から みんなでつくりあげる街へ 公園整備を通して生まれる 住民のまちづくり意識



CASE STUDY

1

6-2号公園

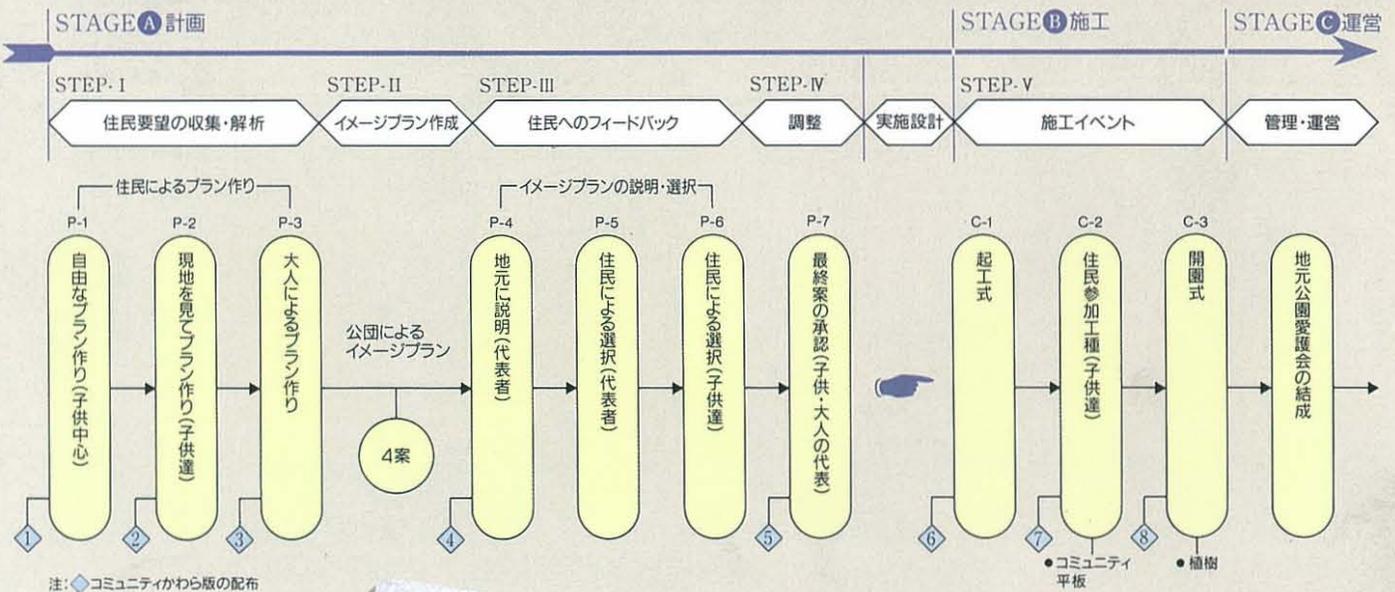
誘致圏内の先行使用宅地に住む、地元地権者の町内会を対象とし、その子供会が中心となって、調整にあたった。第一回目のモデル整備ということで、発生する条件に柔軟に対応できるようプログラムを固定せず、設計段階での参加を頻繁かつ丁寧にいった。

DATA | 概要

公園名称	仮称/児童6-2号公園、正式名称/牛久保西ひかりがおか公園
所在地	横浜市港北区牛久保町(港北 N.T. 第一地区)
対象住民	地元地権者
対象地元組織	牛久保町子供会、町内会
住民調整期間	昭和57年5月~10月
工事期間	昭和58年3月~8月
公園面積	2,500㎡
主要施設	自由広場、木製デッキ、砂場、水飲場、コミュニティ花壇、他
住民参加工種	コミュニティ平板、植樹



FLOW CHART | 作業の流れ



港北ニュータウンは、総面積約2,500ヘクタール、計画人口30万人という首都圏有数の大規模プロジェクトです。このまちづくりの基本理念のひとつである「市民参加によるまちづくり」の実践的な展開として、住民参加方式による公園整備が過去3回にわたって行われました。港北ニュータウンの公園整備は、住民の入居状況や要求に応じて段階的に整備を行うという、基礎整備から施設整備までの段階整備方式がとられています。住民がそれぞれの整備段階で公園づくりに参加できる港北ニュータウン独自の住民参加方式は、「港北ニュータウン方式」とも呼べる、新しい公園整備のシステムです。

ニュータウン内には、総合公園・地区公園・近隣公園・児童公園という4タイプの公園が、それぞれの利用圏に応じて配置されています。このうち住民参加方式による整備の対象となるのは、65カ所配置されている児童公園の一部です。児童公園は、参加対象住民を町内会、子供会、PTAという小規模の単位に絞り込むことができ、将来的にもそれらの組織により積極的な管理・運営が行われることが期待できます。地域住民のコミュニティの核となる公園の整備に住民自らが参加することで、相互のコミュニケーションを深め、まちづくり意識を高める上でも大きな役割を果たすものと思われます。

CASE STUDY

2

12-2号公園

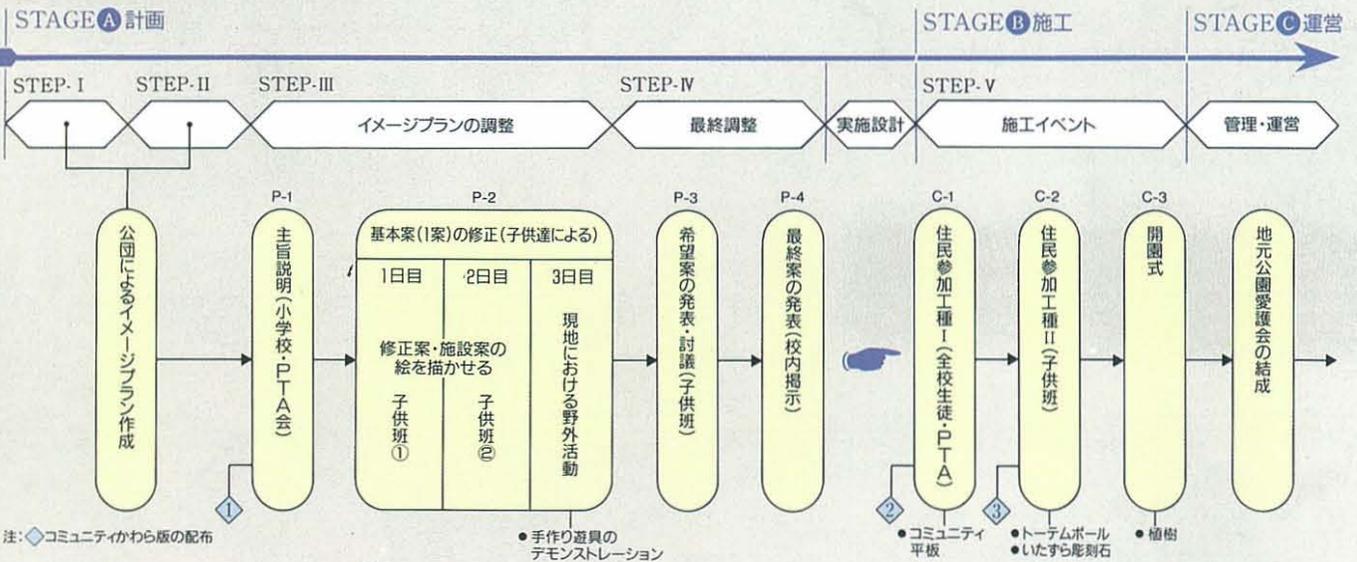
隣接する荏田南小学校およびPTAが中心となって活動し、学校教育の一環としての役割も担った。第一回目において設計段階での対応が細かすぎたという反省から、今回はまず公園から公園全体の基本設計案を提示した。それをベースに、子供達の要求する「モノ」とそれに対するアイデア、参加希望工種を、子供討議によって決定した。

DATA | 概要

公園名称	仮称/児童12-2号公園、正式名称/荏田南のみり公園
所在地	横浜市港北区荏田南二丁目(港北N.T.第二地区)
対象住民	新規住民および地元地権者と、その子弟
対象地元組織	荏田南小学校、小学校PTA会
住民調整期間	昭和59年12月～60年7月
工事期間	昭和60年8月～61年1月
公園面積	1,200㎡
主要施設	自由広場、木製複合遊具、砂場、水飲場、野外工作台、公園利用案内板、コミュニティ花壇、他
住民参加工種	コミュニティ平板、手づくりトーマボール、いたずら彫刻石、植樹



FLOW CHART | 作業の流れ



誘致圏内には、地元地権者中心の町内会、他地区からの転入者が住む2団地の自治会という、計3つの地元組織が存在した。性格の異なる組織のとりまとめが必要であったため、計画から施工、そして管理・運営へと、ゆっくりとしたリズムで調整を試みた。設計段階では第二回目のモデル整備を踏襲し、あらかじめ公園側が作成しておいた基本設計案(3案)を提示した。その際、プランの理解を助けるために模型を使用した。住民の代表者はその中から1案を選択し、修正・追加など微調整を行ったうえで、最終プランを決定した。設計段階での住民参加は、大人の、それぞれの組織の代表者に限定し、子供達を含む一般住民の参加は、施工段階でのイベントや工種に比重を置く形となった。

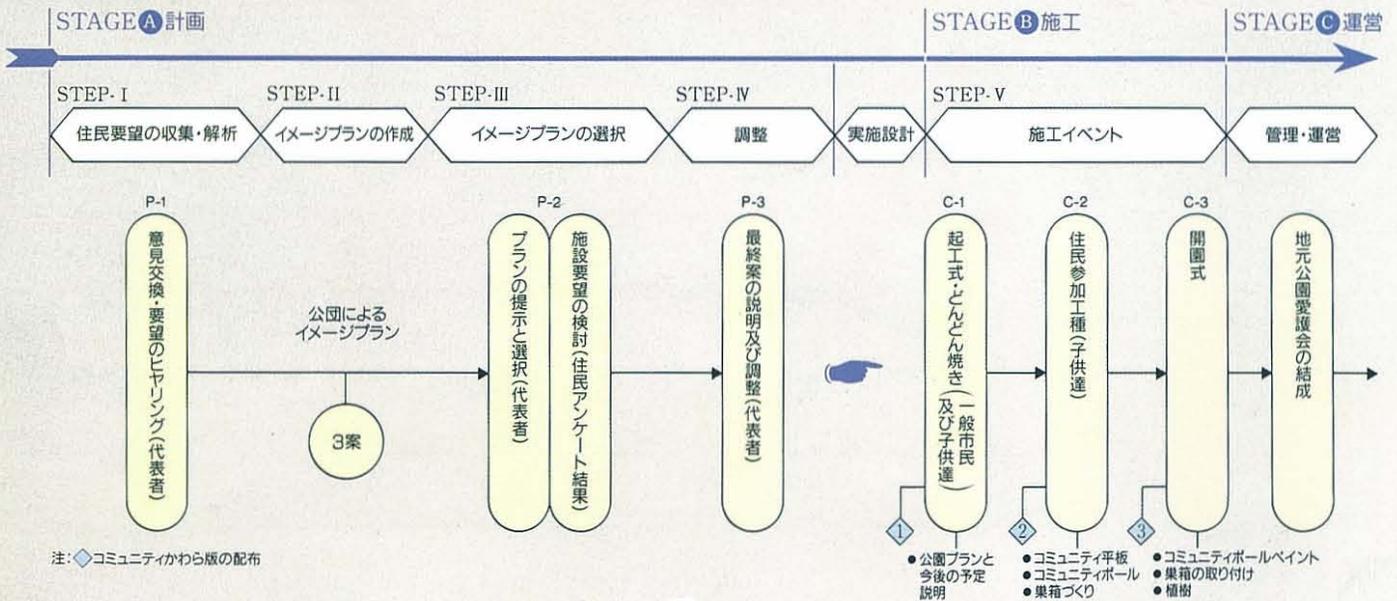


DATA | 概要

公園名称	仮称/児童11-5号公園、正式名称/荻田南もも公園
所在地	横浜市港北区荻田南五丁目(港北N.T. 第二地区)
対象住民	地元地権者、新規住民
対象地元組織	荻田南五丁目町内会、みずきヶ丘団地自治会、けやきヶ丘団地自治会
住民調整期間	昭和62年5月~9月
工事期間	昭和63年2月~6月
公園面積	1,200㎡
主要施設	自由広場、木製複合遊具、ジャングルジム、ブランコ、砂場、水飲場、コミュニティボード、公園案内板、他
住民参加工種	コミュニティ平板、コミュニティポール、果箱、植樹



FLOW CHART | 作業の流れ



過去3件のモデル整備から学んだより効果的な住民参加方式とは

【モデル整備の反省点】

第1回目 初回であったため筋道を通したプロセスで行ったが、丁寧すぎるくらいがあり、公団側の誘導が多すぎた。

第2回目 学校参加に絞り込んだため、地元町内会などからの幅広い意見の集約が図れなかった。

第3回目 コミュニケーションがほとんどない複数の組織が対象となったため、ゆっくりとしたリズムで調整を行ったが、施工段階での参加を充実させるという当初の目的は十分に果たすことができなかった。

【住民参加方式採用の条件】

今後、公園整備を計画する際に、まず対象の児童公園が住民参加方式に適しているか否かを検討する必要がある。

- 地元に住民参加方式を採用したいという要望があること
 - 不特定多数ではなく、地元住民の組織が成立していること
 - 子供達や地元住民への連絡・調整を行う代表者を選出できること
- 以上の条件が揃って初めて、住民参加方式による公園整備が可能といえる。

【今後の整備におけるポイント】

1) 公団側から基本設計案を提示する。

設計段階では、地元住民のニーズを探るといって通常の設計作業より手間がかかることになる。さらに住民がプランを白紙からつくりあげるとは、時間やエネルギーの割に成果が少ないため、考えをスタートさせるたたき台として、公団側が基本設計案を数案提示することが望ましい。このとき、模型を使って提示すると住民にとってプランが身近なものとなり効果が大きい。

2) 推進力となる大人の核組織が必要である。

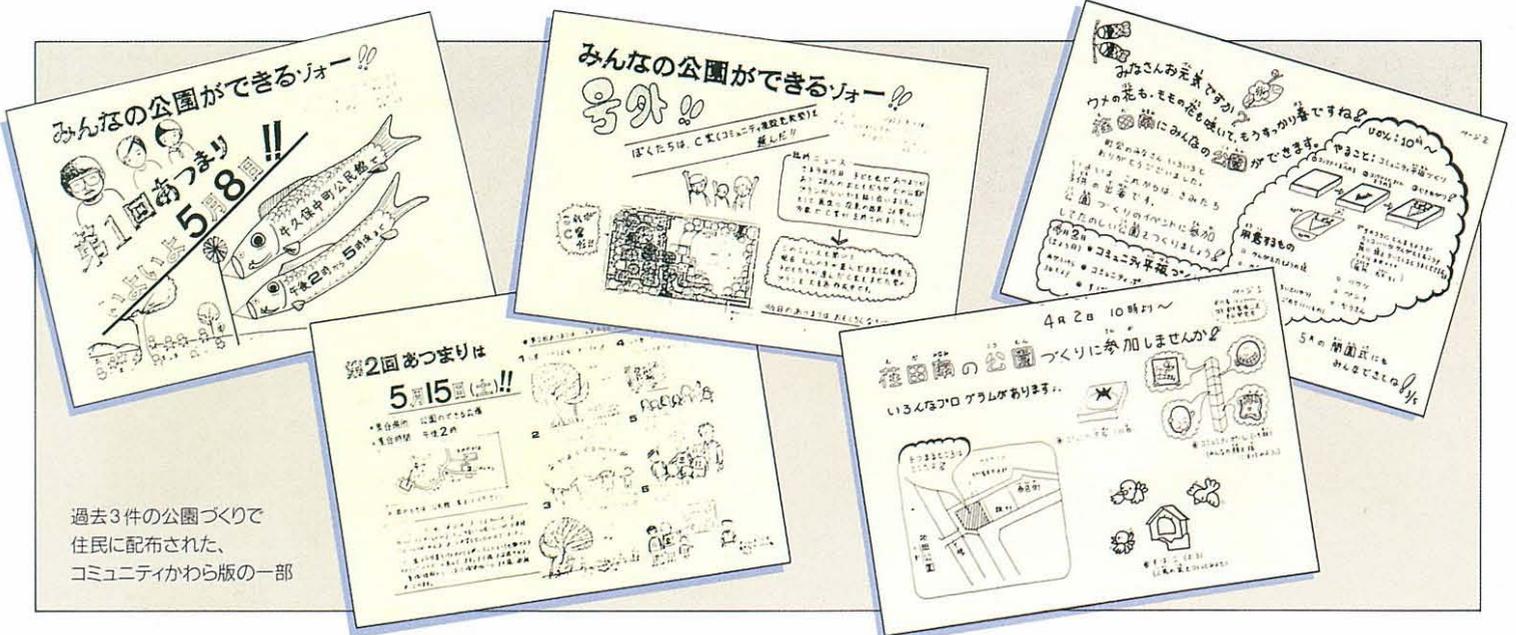
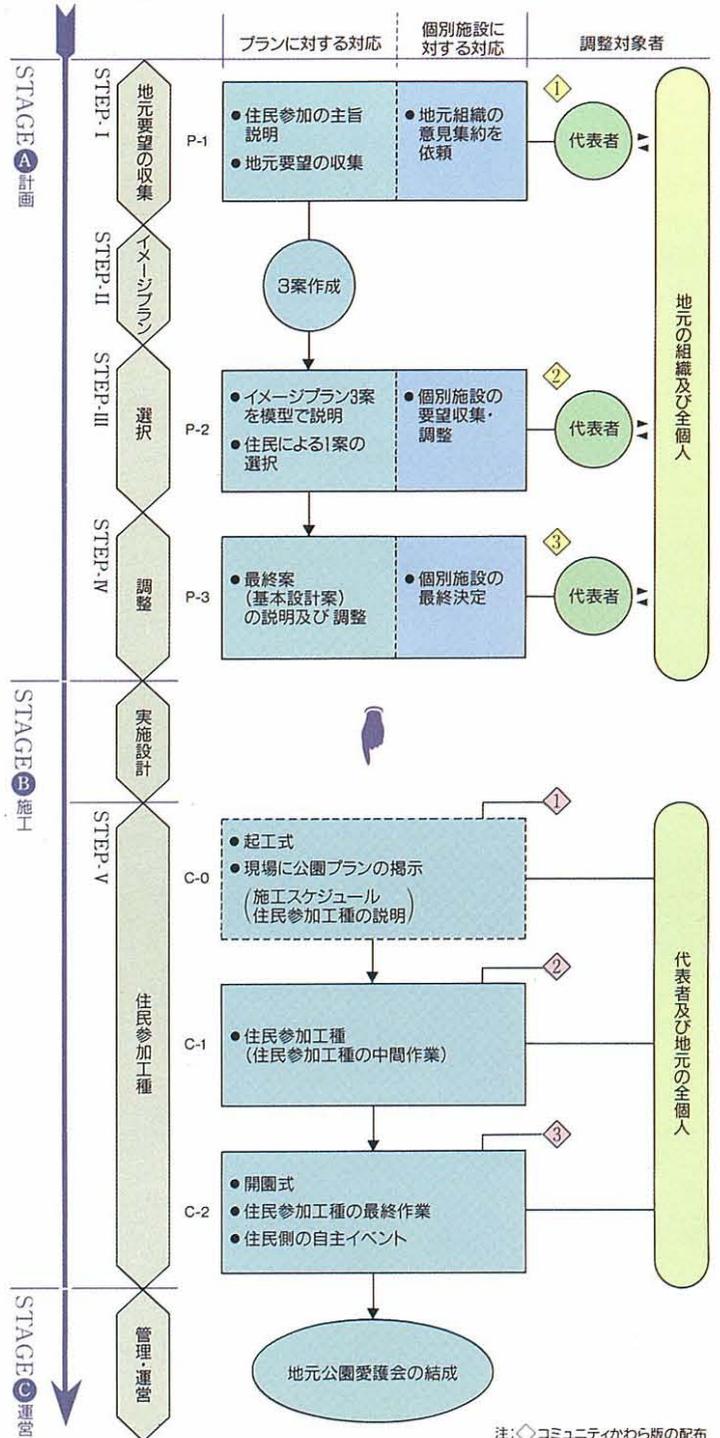
公園整備において子供達の参加は不可欠であるが、事業の推進力とはなり得ないため、大人による核組織が必要である。

3) 設計段階より施工段階に重点を置く。

住民が公園づくりに積極的に参加できる魅力的なイベント、参加の記念が将来も残るようなモノを施工工程に組み込むことにより、公園への愛着がいつそう深まると思われる。施工業者の負担が必要以上に多くならない範囲で、施工段階における住民参加工種の充実と拡大を検討したい。

過去3件のモデル整備によって得た、上記3つのポイントを踏まえながら、最小のアクションで最大の効果が得られる方式を考えるべきである。

MODEL FLOW CHART | 作業の流れ(案)



GREEN MATRIX SYSTEM

CASE STUDY ④
6-2号公園

CASE STUDY ③
11-5号公園

CASE STUDY ②
12-2号公園



港北ニュータウンのグリーン・マトリクス・システム

港北ニュータウンでは、公園・緑道・校庭・運動広場・保存緑地・神社仏閣などを、緑道や歩行者専用道路で結んだグリーン・マトリクス・システムを採用している。豊かな自然に恵まれた、コミュニティとレクリエーション活動の場を体系化することにより、敷地の有効利用、貴重な緑の保存・活用、都市防災などに役立っている。住民参加方式の対象となる児童公園も、このグリーン・マトリクス・システムによってニュータウンのオープンスペースの中に有機的に配置されている。

INDEX					
	児童公園		保存緑地		水系(池)
	公園・緑道・運動広場		歩行者専用道路		河川